頓阿法師の歌枕と旅

――田子の浦を中心に――

李　相旻

1．初めに

頓阿は、南北朝時代の歌僧で当時、慶運・浄弁・兼好と共に為世門の和歌四天王と称され、二条派歌壇の重鎮とされてきた人物である。頓阿の著作としては、家集に『草庵集』『続草庵集』、歌学書に『井蛙抄』、二条良基が提示した質問に対する頓阿の答を記録した『愚問賢注』があり、これらは近世堂上派に非常に重んじられ、それ以降の多くの歌人達に注目されてきた。彼の歌風については、当時、二条良基の頓阿に対しての言及が参考になると思われる。二条良基は自身の『近来風躰』で頓阿の和歌を評して、「頓阿はかかり幽玄にすがたなだらかに、ことぐしくなくて、しかも歌ごとに一かどめづらしく当座の感も有しにや。」と評し、いわば平淡ながらも、才気溢れ、周りと調和を重んじる頓阿の歌の特徴を指摘している。しかし、こういう彼の歌風に対する高評価とは裏腹に、当時冷泉派を中心に今川了俊やその弟子、正徹などから、古歌にただすがるのみで変化の乏しい歌を詠む、と激しい批判[1]を受けてもいる。全体の歌の調和を重んじ、無理に珍奇な詞で歌を飾り立てることを避けようとした頓阿の歌風は、果たして古歌に依拠し、安全な選択のみを好むものと断定してよいのだろうか。本稿はこういう些細な疑問から出発していきたいと思う。

2

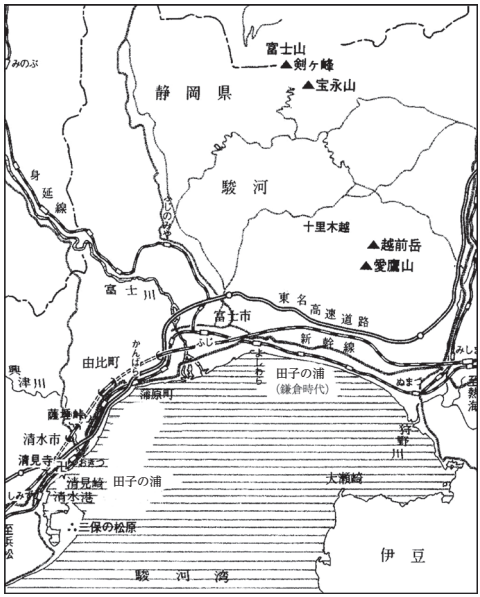
まず、田子の浦に関わる最も著名な歌をあげるとしたら、

誰もが次の万葉歌を連想するだろう。

1　田児之浦（タコノウラニ）従　打出（ウチイデ）而見者（ミレハ）　眞白衣（シロタヘノ）　不盡能高嶺（フジノタカネニ）　雪波零家留（ユキハフリケル）

（万葉集・巻三・318　／　新古今集・冬・675・山部赤人）[2]

この歌は、山部赤人が東国を旅した時、田子の浦から富士を仰ぎ見た感動を実感に基づいて詠んだものであり、詞書に「山部宿祢赤人望二不尽山一歌一首　并短歌」とある著名な長歌の反歌である。特に詠歌の舞台となった田子の浦は、現在では、静岡県富士市の海岸を指すが、昔の田子の浦は現在地とはやや違ったようである。昔の田子の浦の位置については、真淵の『万葉考』（明治五年）で、今の薩埵山付近から伊豆の山もとまでを指すというおよその目星が付けられた。それ以降、その正確な位置を定めるべく様々な推定が行われたものの、未だ結論を見ない状態にある。概ね、従来の薩埵峠を境に由比・蒲原辺りまでを含む海岸とする説[3]と、清見崎附近から薩埵峠までの地とする説[4]とに分かれている。『続日本紀』の記事、「部内（ブナイ）廬原（いほはら）郡多胡（たごの）浦の浜（うらはま）に黄金（くがね）を獲（え）て献（たてまつ）る」と、『更級日記』の「清見が関の浪も高くなりぬべし。おもしろきことかぎりなし。田子の浦は浪高くて、舟にて漕ぎめぐる」をどう解釈するか、そして、中世以降の史料までを根拠とするかどうかによって、意見が分かれるのである。ただし、赤人が歌を詠出した位置については、森本治吉の実地踏査以来、現在の薩埵峠を東に越した地点が多く支持されている。原文の「うちいでて」は視界の遮られていた地点から、急に富士を望める場所に出て視界が開けたという意味に他ならず、興津川に沿って北上し、内洞の辺りから薩埵峠を東へ越えて西倉沢に出た地点から見える富士の景こそ、もっとも赤人が詠んだ歌の本意にふさわしく、有力であると判断されたから



田子の浦

である。本稿は、頓阿が見た田子の浦に重点を置くべきもので、赤人が見た田子の浦を正確に規定することをめざすものではない。諸説、それぞれ、問題を孕んでいるが、上代に近い資料のみに基づき、田子の浦の西限は清見崎辺り、東限は蒲原辺りと大まかに捉える立場にとどめておきたい。次に、この田子の浦が赤人の万葉時代以降、いかに詠まれるようになったか見てみよう。

2　駿河なる田子の浦波たたぬ日はあれども君を恋ひぬ日はなし　（古今集・恋一・489・よみ人しらず）

3　田子の浦にきみが心をなしてしか富士てふ山[5]をおもひしらせむ　（忠岑集・37）

4　わが恋をしらんと思はばたごの浦にたつらん浪のかずをかぞへよ　（後撰集・恋一・630・藤原興風）

5　田子の浦に霞の深く見ゆるかなもしほの煙たちやそふらむ　（拾遺集・雑春・1018・能宣）

6　夜もすがら田子の浦波よせしおとを富士のたかねにきかざりけるよ（馬内侍集・91）

7　田子の浦のもしほもやかぬ五月雨にたえぬは富士の煙なりけり　（風雅集・365・夏・藤原清輔／清輔集・76）

平安時代までの田子の浦を詠んだ歌を見てみると、男女の心を田子の浦と富士に寄せている3・6のように、依然として赤人の見た風景がうかがえる歌も見られる。しかし、この二首以外、2・4のように絶えず波打つ田子の浦の景に激しい恋の心を譬えたり、深く霞んだ田子の浦の朦朧とした浜辺の景色を詠んだ7など、調査の限り、いずれも、「なみ」、「あま」、「もしほ」、「舟」、「浜千鳥」など、海がらみの素材と共に詠まれることが多くなる。いつの間にか田子の浦の景のみが享受されるようになったのである。しかし、こうして忘れられていた赤人の風景を平安歌壇に復活させたのは、後に『風雅和歌集』にも入首した7の藤原清輔歌である。以前まで主流であった海の素材、「藻塩」を媒介に富士の煙を詠み込んだ歌で、これをきっかけに赤人の田子の浦の風景は平安末期から再び、注目を集めるようになったと思われる。次に鎌倉時代以後の田子の浦の歌を見てみると、平安時代とは多少の違いが確認できる。

8　白妙の富士の高嶺に雪ふればこほらでさゆる田子の浦浪　（千五百番歌合・2054・讃岐）

嘉元百首歌たてまつりし時、山

9　富士のねを田子の浦より見渡せば煙も空にたたぬ日ぞなき[6]　（新拾遺集・雑上・1739・定為）

たごのうら

10　田子のあまのやく塩釜はふじのねのふもとにたたぬけ

ぶりなりけり　　（兼好法師集・78）

山月

11　ふじのねの雪よりいづる秋の月氷やくだく田子のうらなみ　　（為尹千首・405）

田子の浦から富士山の荘厳な姿を仰いだ定為の9に明らかだが、8～11の例を見てみると、依然として浜辺の素材とともに詠まれていながらも、この時期から平安時代では姿を消していた富士が徐々に田子の浦の景に再登場してくることが分かる。多く先学の指摘のように、鎌倉時代は東西交通の幹線としての東海道が整備され、東海道と東国への関心が高まった時代である。その流れと共に、長い間ほこりをかぶっていた田子の浦から仰いだ富士という古い万葉の風景が、清輔歌をきっかけに再び詠歌の主題としてよみがえってきたのである。しかし、ここで一つ注意しなければならないのは、鎌倉時代の歌人達にとって田子の浦の風景がいかなるものだったのかを確認することである。先ほど、上代の田子の浦の範囲について、西は清見崎辺りまで、東は由比・蒲原辺りまでと大まかに想定しておいたわけだが、どうやら鎌倉時代はやや違うようである。まず、仁治三（1242）年頃、清見が関に泊まった『東関紀行』の作者が、駿河湾に沿って三島まで旅した行程を確認してみたい。清見潟・興津を経て蒲原の宿駅を通った作者は、

田子の浦に打ち出でて、富士の高嶺を見れば・・（中略）・・富士の嶺の風にただよふ白雲を天津乙女が袖かとぞ見る。浮嶋が原はいづくよりまさりて見ゆ。北は富士の麓にて、西東へはるばるとながき沼あり。

と、その辺りから田子の浦に出て富士を眺めている。当時の蒲原駅の位置に関しては、『三代実録』貞観六（864）年十二月一〇日条に「廃[二]柏原駅[一]富士郡蒲原駅遷[二]立於富士河東野[一]」と見え、駿河国が駅伝制の負担緩和のために柏原駅を廃し、蒲原駅を富士川の東野に移したとあるので、おそらく『東関紀行』の作者は、富士川を東に渡って蒲原駅を通った後、浮島ヶ原までの地域を田子の浦と見ていることが分かる。そして、弘安二（1279）年『十六夜日記』の阿仏尼もこの田子の浦を通って

廿七日、明けはなれて後、富士川河渡る。朝川いと寒し。数ふれば十五瀬をぞ渡りぬる。・・・（中略）・・・今日は、日いとうららかにて、田子の浦に打ち出づ。海人どもの漁するをみても・・・（下略）

先ほどの『東関紀行』の作者と同じく、富士川を渡ってから田子の浦に出たと記している。さらに、弘安三（1280）年、飛鳥井雅有の『春の深山路』を見てみても、

廿四日、富士川河も袖つくばかり浅くて、心を砕く波もなし。あまた瀬流れ分かれたる中に、家少々あり。堰の島とぞいふなる。また小宿あり。田子の宿とぞ申すめる。・・・（中略）・・・浮島が原の内なれど、小石多し。青野・小松原・柏原などもいふ所あり。さのみは記しがたし。塩焼く煙の西に靡きたるを見て、来しかたに靡きにけりな藻塩焼く煙にたぐふ我が思ひかな。田子の浦波まことにひまなく立ち騒ぐさま、いと面白し。

のように、田子の浦は富士川を渡っての地と想定していたことが分かる。澤潟久孝は、中世の田子の浦について、「抑も田兒の浦と富士とを結びつけたものが、赤人の作であり、従つてこの歌に対する尊敬の念から最も富士のよく見える所として岩淵駅附近を田兒の浦に擬しようとする事は、当然古人もまた試みたところと想像せられる。」と指摘し、「田兒の浦に打ちでて見ればと讀みつつこの歌を愛誦した中世の文人の解釈態度がそこにあらはれたものとも云へるのである」と結論づけている。[7] たしかに平安時代、赤人の歌訓は原文の「田子の浦ゆ」の形ではなく、『五代集歌枕』や『和歌初学抄』、さらに、先ほどの『東関紀行』や『十六夜日記』にも「田子の浦に」と記載されている。どうやら中世人には「田子の浦ゆ」の「ゆ」を、経過を表す上代の助詞「ゆ」とは解せなかったようである。それによって、赤人の歌を「田子の浦に」と認知し、もっとも富士山がくっきりと見える地を赤人の田子の浦と推定したと思われる。しかし、この富士川以東の地域は赤人の詠歌地点ではない。当然、田子の浦と富士を詠んだ中世人の感覚は赤人歌のそれとは変わってくることは容易に想像できる。次に具体例を挙げて見てみたい。

まず、8から見ると、作中主体の視線は富士山→その上に降る雪→田子の浦浪の順に移動しており、赤人歌と視線を変えているものの、歌の心は田子の浦に焦点を合わせてその一帯の冬の景色を詠むことにある。さらに9は赤人歌の雪を煙に変え、先ほどの古今歌、2の表現とうまくなじませている。二首とも本歌の風情や心に密着した詠みぶりといえるが、赤人の詠んだ隠れていた富士を田子の浦より発見した感動というより、二首から感じられるのは遠方からゆったりと眺めた静寂感であろう。一方、10の場合も、田子の浦と富士を取り入れているのみで、本歌との表現上の関係性も乏しく、古代の田子の浦の風景よりは「さびしとてやくとしもなき炭窯のたたぬ煙の大原の里」（明日香井和歌集・362）に近い。さらに11は、富士より昇った月とその月に照らされた海面を浪に砕ける氷に譬えた歌である。

田子の浦の風景に「きぶね川たまちるせぜのいは浪に氷をくだく秋のよの月」（千載集・雑中・1274・俊成）を重畳させ、作中主体の焦点は月光に輝いている田子の浦の世界に絞られているかに見える。以上、赤人歌の風景を本歌にしつつも、新しく歌を詠む際の各々の歌人の工夫がうかがえるが、やはり、赤人の見た風景が持つ感動は大分薄れ、もしくはそれからかけ離れた方向へずらして、田子の浦を歌の中に溶け込ませようとしている。

3

では、頓阿は、赤人の万葉歌を本歌にし、自身の詠に取り込む際にいかなる態度を取っているのであろうか。まず、頓阿が田子の浦と富士の高嶺をともに詠んだ歌を挙げておきたい。

金蓮寺にて名所歌よみ侍りし時、富士山

田子の浦に向かう道中（二十代の作）[8]

12　たごのうらはまだはるかなる東路にけふより富士の高嶺をぞみる　（草庵集・羈旅・1270）

建武二年内裏千首歌に、春天象

富士と田子の浦の風景（四十七歳の作）

13　朝ぼらけ霞へだてて田子のうらに打出でてみれば山の端もなし　（草庵集・春上・47）

海辺雪

田子の浦の海面に映った富士（未詳）

14　田子の浦や富士のたかねの影見えて浪もひとつにふれる白雪　（続草庵集・冬・314）

浦雪

田子の浦から見える富士と曙の空（未詳）

15　ふじのねは雲ぞかかれる田子のうらの雪に打ちいづる明ぼのの空　（草庵集・雑歌・794）

以上、頓阿の詠んだ田子の浦の歌はすべて富士山を一緒に詠み込み、しかも、赤人歌を本歌にしていることに留意を要する。そして、これらの歌を一読してみると、すべて題詠で詠まれたにも関わらず、まるで旅人の足取りに沿ったような現実感が歌の基礎になっていることが分かる。まず、12は「富士の高嶺」が見上げられるというあの田子の浦はまだ遙かなのに、もう壮大なる「富士の嶺」を発見したという、都から東国への旅の途上での感動が現実感あふれる形で詠まれている。さらに、13は赤人の田子の浦の風景を目に焼き付けたいと願い、田子の浦に〈打ち出で〉たが、富士は春霞に隠れて見えず、本歌の世界への期待と現実との乖離から来る春の断想が詠まれている。もちろん、この歌の背景には赤人の歌以外にも、先ほどの5の大中臣能宣の歌も関わっているが、山に隠れていた富士と田子の

浦を発見する万葉の感動が歌の基底にあり、その風景に憧れて薩埵峠を越える作中主体の足取りが目に浮かぶ。また、14は海面に映った波打つ富士の影の上に、雪が降りかかる景を詠んでいる。富士に降り積もった雪の白、田子の浦の浪の白、そして、その上に降ってくる雪の白、その共通性によって、それぞれの景物は一つに融合し、新たな田子の浦の空間を紡ぎ出している。赤人を慕って富士と海が重なる田子の浦べりを歩いた作中主体の心がうかがえる歌であろう。15の場合、作者は早く富士が見たく、雪が降っているのもかまわず明ぼのに田子の浦に出て富士を見上げるが、眺めた視線の先には雪雲がかかっていて富士の頂は見えないのである。それは今、田子の浦で雪を降らせている雲につながっている。富士にのみ雪がある、という本歌から、今見ている自分の方に雪が降っている、と変えている歌で、東路の途上、旅程を急ぐため、早朝、田子の浦に出た作中主体の心が表現されている。では、このような赤人歌の改変は何をヒントにしているだろうか。まず、ここで、頓阿の田子の浦詠と先行歌との影響関係を確認してみたい。まず、14の「浪もひとつに」という表現は定家の次の例にその先蹤を見いだすことが出来る。

田籠浦

16　たごのうらの浪もひとつにたつ雲の色わかれ行く春の明ぼの　（拾遺愚草・1219）

16では、田子の浦に浪と雲を詠み込み、浪と雲がその白さ故に、ひとつに溶け合っている景から、朝の日差しが雲を染め始め、やがて区別がつくようになったと詠まれている。定家は「浪もひとつに」という表現で、海に立つ浪とその上に立つ雲が水平線で重なり合い、末の句の「色わかれ行く」によって時間の経過につれて分化してゆく風景を繊細な感覚で捉えている。この「浪もひとつに」という表現は、次の『草庵集』の17・18においても確認することができる。

等持院贈左大臣家五首に

17　みなの川波もひとつにつくばねの雲ぞうきたつ五月雨の比　（草庵集・夏・327）

浦雪

18　うづもれぬなみもひとつに白妙のふぢえのうらの雪の明ぼの　（草庵集・冬・793）

17では、五月雨に激しくなった「浪」とそこから湧き上がってくるかのように見える「つくばねの雲」、そして、18は雪に埋もれるはずのない浪なのに「ふぢえのうらの雪」と一つに白く見えると詠んで、二首とも定家の詠み方の延

長線上にあると思われる。ここで頓阿の14を再び見てみると、田子の浦の浪とその海面に降る雪を「浪もひとつに」と、二つの景物の未分化を詠み、定家と同じ発想に基づいていることが分かる。その上、第三句「影見えて」と詠むことで、田子の浦の海面に映った風景に転換している。特に14の場合、注目すべきなのは、定家のみではなく、次の他阿上人歌との関わりである。

冬

19　水底に富士の高根の影見えて雪の上こす田子の浦波　（他阿上人集・1056）

冬

20　田子の浦や波間に沈む山見えて水にも消えぬ富士のねの雪　（他阿上人集・1055）

又、文保二年極月の別時中より、同三年正月上旬の比病悩以前まで、よみ玉ふ歌

21　田子の浦に立つや煙のかげ見えて富士の高根は浪にしづまず　（他阿上人集・1454）

以上の歌は、『他阿上人集』において、田子の浦が詠まれた全例である。特に19・21の第三句の「かげ見えて」と14の頓阿歌の第三句とが共通している。そして、20の「山見えて」も表現は多少違うものの、やはり意味の上では類似している。こういう他阿が詠んだ田子の浦は、海面に映る富士の影と雪、もしくは煙と溶け合っている景を詠んでいる点、頓阿詠の先蹤であると思われる。そして、田子の浦を詠んだ他阿上人詠の全てが海に映った富士という発想に依拠し、冬の景（21の場合、同題で詠まれた全歌の主題が冬の景である）を詠んでいる。やはり田子の浦を旅した他阿の実体験がこれらの歌に強く反映されていると思われるのである。実際、金井清光氏[9]は、「真教の遊行は越前を主とする北陸地方と、上野・下野・武蔵・相模の関東と、この両地方を結ぶ街道筋の信濃・甲斐におおむね限定されており、このことは真教の遊行が一遍の遊行と本質的に異なることを示している。かれは善光寺信仰の特に盛んな地域に布教の範囲を限定して重点的に遊行し、有力な檀那（だんな）を獲得して教団の基礎を作ろうとしたのであった。」と言い、彼の遊行は新しい教団の基盤を構築するため、北陸と関東を中心に行われたとしている。

正和元年、或人の所望によりて熊野へまうで給ひし道すがら、よみ給ひける

22　雨くだす神のしるしか時しれば雲の笠きる山は富士の根　（他阿上人集・225）

23　ときわかず富士の高根にふる雪の麓になれば冬と見え

けり　（他阿上人集・226）

また、22・23は、詞書「熊野へまうで給ひし道すがら」から、彼が熊野に参詣する途上、実際に富士山を拝んで詠んだと思われる例であり、他阿上人の詠む富士山には彼自身の旅の経験が色濃く反映していることが分かる。ここで、頓阿と他阿との関係について確認しておく必要を感じる。頓阿は他阿の門下で、のちに四条道場を開く浄阿との関わりもあったとされている。稲田利徳氏[10]によると、「他阿上人法語」所収「頓阿阿弥仏へつかはさる御返事[11]」の記述に「御ふみにやゝもすれば称名もゝのうく、いよ〳〵貪欲愛念の業識増進せしむとみえさふらふ」とあるを、悩みを訴えた頓阿への他阿上人からの書状と判断した場合、頓阿と他阿とは直接消息を交わす間柄であり、「浄阿つきそひまいらせても」などの記述から、彼は四条道場金蓮寺を創建した浄阿門で修行していた人物であると推測できるという。さらに藤原正義氏[12]もこの消息について「頓阿はこの金蓮寺に出入し浄阿と親近していたわけであるが、右の消息は、浄阿が延慶二（1309）年に上洛、応長元（1311）年に金蓮寺を創建したことなどからみて、延慶二年以後数年間、つまり頓阿二十代のものであるとみてよいであろう。」と指摘している。もちろん、当時、時衆集団において、阿弥陀号を使うことはかなり横行していた。『他阿上人法語』に登場する頓阿が、当該の頓阿と同一人物とははっきり言い切れないものの、『草庵集』の詞書に「金蓮寺にて」「金蓮寺三首」「金蓮寺歌合に」など、金蓮寺が多数登場することを勘案すると、仏道修行で精進し、貪欲愛念に悩んでいた人物が若き頓阿である可能性は高いのではないかと推測できる。他阿上人と頓阿との関係は、次の表現からも推定される。

弥陀本願の心を

24　さりともとわたす御法を頼むかなあしわけをぶねさはりある身に　（草庵集・釈教・1378）

25　湊入之（ミナトイリノ）葦別小船（アシワケヲブネ）　障多見（サハリオホミ）吾念君尓（ワガオモフキミニ）
不相頃者鴨（アハヌコロカモ）　（万葉集・巻十一・2745／拾遺集・恋四・853・柿本人麿）

26　小船こぐ湊の蘆まともすれば障ある世ぞ袖はぬれける　（続後拾遺集・釈教・1118・道性）

或人、世間の態にのみ障られて、道場へ詣得ぬ事を嘆き申すとて

27　たのむぞよ障有る身と思ふにも西に曇らぬ月のしるべを　（他阿上人集・1199）

24は、『万葉集』の25を本歌にし、下句で本歌を媒介にしながら、煩悩に悩まされる作者の心を「さはりある身」と

して表現している。自己の問題に鋭い省察を加えながらも、それでもやはり阿弥陀の約束を頼みにするという作者の決意がうかがえる。そして、この「さはりある身」という表現は、本歌の「さはりおほみ」の変奏と思われるが、問題はこの「さはり」がどう認識されているかである。たとえば、同じ本歌に依拠しながらも、26の場合は、仏道への妨げになるのはあくまでも世間という外的要素にあり、頓阿とは障りへの認識の差を見せている。この「さはりある身」という表現は当該歌以外、唯一、27の他阿歌にあるのみで、その詞書からも分かるように、世間の目をのみ意識し、仏道への修行を怠る者への歌である。ただし、それは修行の怠慢に対する避難や戒めの形を取るより、作者自身の省察と反省から手に入れた悟りを暖かい心情を込めて助言する形を取っている。こうした心の捉え方は基本的に頓阿の24と同じであり、表現の共通性をもっている。これは他阿上人と頓阿の関係について一つの裏付けになるかも知れない。今後、他阿と頓阿との事跡を視野に入れつつ、二人の詠歌の関連性を探ることは、二人の関係を解き明かす一つの糸口になるのではないかと思われる。

4

以上、田子の浦の頓阿詠の解釈と、定家並びに他阿上人の詠との影響関係を確認してみた。ここで赤人の万葉歌を本歌にした際に頓阿はいかなる立場を取っていたかの問題に話をもどしたい。彼は万葉の世界をいかに自分の歌に取り入れていったのだろうか。

まず、赤人の見た田子の浦を、頓阿はどの辺りだと思っていたかが新たに問題になる。前に中世人の田子の浦に対する認識は、およそ富士川以東の地域であり、上代の田子の浦とはかなり違う風景だったと推定した。それは、青木厚子氏の論[13]によると、昔の東海道の経過地の実相から見て、蒲原から富士川を渡るためには、難流していた下流を避け、どうやら河に沿って北上しなければならなかったようで、蒲原辺りを過ぎてから、前の富士を眺めると、すでに海は人の背後に位置することになり、富士と海とを同時に眺めることはできなくなるからである。しかし、頓阿は14の第三句、「影みえて」と詠み、富士と海が重なって見える田子の浦を詠んでいる。実際に人間の視界に富士と海が重なる地点を予想してみると、薩埵峠から蒲原町辺りまでと限定できるのであり、頓阿の考えていた田子の浦の位置は由比

・蒲原辺りであった可能性がある。すると、頓阿の田子の浦への認識は富士川以東を田子の浦と見ていた鎌倉時代の認識とは異なることになる。この頓阿の「影みえて」という表現にもっとも影響を与えたのは、他阿の詠に他ならない。先ほど述べてきた通り、他阿の詠んだ田子の浦は、彼自身の実体験が深く関わっている。やはり頓阿の田子の浦についての認識は、他阿の認識に拠るところが大きいと思われる。やや時代は下るが、宗祇の『名所方角抄』（室町中期）に「三保の入江より浮島かはら傳の浦おしなへて田子の浦と惣名に云なり」とあり、天文十四（1545）年、宗牧の『東国紀行』には「田子浦とは此邊（蒲原駅）にやなど尋ねたれば、清見が關の此方六里ばかりの程、皆田子の浦となむ。」とあり、どうやら頓阿の死後、清見崎から富士川辺りまでの広い範囲を指すようになったことがうかがえる。すると、田子の浦が、『更級日記』の清見崎から『十六夜日記』の富士川辺りまでという認識がいつから芽生えてきたかは不明とはいえ、『更級日記』の田子の浦と、鎌倉時代の富士川辺りの田子の浦との間に認識の錯綜が生じた時期があったのではないかと思われる。他阿上人は、その錯綜の中、まず、自分の旅の実体験に従いながら、由比・蒲原辺りの富士と田子の浦の景を赤人の詠んだ景と解釈したのではないだろうか。

ここで、田子の浦を詠んだ頓阿歌を想起してみたい。彼の歌は、それぞれ、田子の浦から見上げた富士の雄姿を詠んだ赤人の歌に依拠して詠まれている。題詠という制約をはずして、この四首を通覧してみると、田子の浦へ向かう途上であれ、海面に映った富士であれ、もしくは念願の富士が霞に隔てられて見えなかったという期待外れの心情であれ、そのすべてを貫いている作中主体の意識は、田子の浦を通りながら、富士を仰ぐ赤人のそれと重なるものがある。つまり、この四首は赤人の万葉歌の心に寄り添って詠まれているといえるであろう。だが、それにしても、田子の浦と富士に纏わる歌を同じ本歌の心に依りながら、四首も詠むということはかなり珍しいことだと思われる。そういう頓阿の田子の浦と富士へのこだわりは、歌の影響以外にも、より現実的な理由があるがあるように思われる。次の三首を見てみたい。

そのかみ、うつの山を越え侍りし時、つたの種をとりて

庵室に植ゑて侍りしが、年年に紅葉したるを見て

28　うつの山越えしや夢に成りはてん垣ほの蔦の色にいでずは

（続草庵集・秋・256）

善光寺にまゐりて侍りし時、九月十三日夜にをばすて山を越ゆとて

29　こよひしもをばすて山を眺むればたぐひなきまですめる月かな　（草庵集・羈旅・1279）

九月つごもりの日、むさし野を過ぐとて

30　武蔵野は猶行末の遠ければ秋はけふこそかぎりなりけれ　（草庵集・羈旅・1283）

この三首は、詞書から分かるように、頓阿が駿河国の「宇津山」、信州の「善光寺」、そして、武蔵野に足を運んだ時に詠まれた歌である。実際、彼が東国遊行の経験を持ち、特に28の詞書、「うつの山を越え侍りし時」から、当時の東海道の難路と言われた岡部と丸子間を通って東国へ向かったことが分かるのである。さらに、富士を詠んだ頓阿の歌を挙げてみたい。

陸奥守顕氏家にて、旅行を

31　東路ぞ思へばとほき富士の根のふもとに来ても日数経にけり　（草庵集・羈旅・1271）

大膳大夫頼康家にて歌よみ侍りし時、羈中眺望

32　都にてまづやかたらん大空のなかばにみゆるふじのみ雪を　（草庵集・羈旅・1272）

この二首は、頓阿が陸奥守顕氏家や大膳大夫頼康、すなわち土岐頼康家にて詠んだ歌である。この31・32は、先ほどの12の「たごのうらはまだはるかなる東路・・・」に続く形で『草庵集』に収められている。12に引き続き、31は、東国の旅の途中、数日にわたって富士を間近に見続けたことを、そして、32は、空にそびえる富士の高さを帰京の際の土産話にしたいと詠んでいる。二首とも題詠とはいえ、「旅行」「羈中」という題であるため、彼自身の旅の記憶を透き写しにして詠まれた感を拭えない。しかも、先ほどの15を再び想起してみると「雪に打ちいづる明ぼのの空」という表現は、一見難解に思われるが、田子の浦から北東にそびえ立つ富士山を見ている作中主体の位置や、東から明けてゆく明ぼのの空との地理的な関係に基づいて詠まれている。題詠とはいえ、田子の浦の風景を目に焼き付けた、実感による表現であると思しく、頓阿の田子の浦を詠んだ歌群は、多かれ少なかれ、この経験に根付いていると思う。頓阿は、赤人の見た風景を見出だそうとし、他阿と同様、海べりの広い範囲を歩いた。そして、他阿の「影見えて」を手がかりに、古典から得た感動に寄り添いながら、今、眼前の旅の現実から古典の感動を見出だしているのである。一方、実体験に従い冬の田子の浦に映った富士の景のみに主題を限定した他阿の詠に比べて、頓阿は、霞、雪、

明ぼのなど、その背景を変えている。即ち、赤人の詠んだ古代の景色に心を寄せながらも自身の虚構の美的空間に古典を取り入れ、その上に旅の現実から目にした富士と田子の風景をうまくなじませているのである。このように、本歌の心を生かしながらその世界に寄り添って詠むことは、頓阿自身の『井蛙抄』の言及に換言すると、「本歌の心にすがりて」もしくは「本歌の心になりかへりて」という姿勢を指すのではないだろうか。「すがる」「なりかへる」という表現自体、曖昧でありながらも、さほど変わらない意味で、[14]両方とも『毎月抄』の「よく〳〵心をすまして、その一境にいりふして」や、『京極中納言相語』の「我身を皆業平になして詠む」という言及と通じる意味であると思われる。すなわちこの詠法は、石田吉貞の論[15]に依ると、「本歌の心の世界に没入し、全くその世界の人となり切って、その世界の中で自由に新しき構想を行」うことであり、「本歌との結合による微妙な小説的構想が見られ、物語的構想と有心的纒綿とを好んだ、定家らしい手法」と言えるのであろう。

では、頓阿が旅の経験を歌の中でどのように生かしていたか、次の逢坂の関を詠んだ歌を見てみたい。

大膳大夫頼康、佐女牛の若宮にて歌読み侍りしに、

野鹿

33　あはづ野にねをなく鹿は相坂のちかきかひなく妻やこふらん　（草庵集・秋上・498）

関路旅

34　逢坂の関こゆるよりやがてはや都の山ぞ見えずなりゆく　（草庵集・羇旅・1266）

前太政大臣家にて、朝旅行

35　相坂の鳥の音遠く成りにけり朝露わくる粟津野の原　（草庵集・羇旅・1267／新拾遺集・羇旅・777）

33は、逢坂と粟津を掛詞によって結びつけ、粟津野の鹿は「逢う」という名の逢坂に近い甲斐もなく、牝鹿を恋い慕って泣いているという意である。34は、逢坂の関を越えるやいなや都の山々が見えなくなった、という旅の実感に即して詠んだ歌である。さらに35の作中主体は、都を離れ粟津野では逢坂の関にいるという鶏の鳴き声が遠くなったと詠んでおり、逢えないまま、鶏の声にせかされ、朝露にぬれ、涙を流している。題の「朝」を表現するため、逢坂と粟津野の地理的な関係に恋歌の情趣を取り込み、露には、後に残してきたものへの未練と不安が読み取れる。33・34は都から東国へ差し掛かる旅人の心境に寄り添って詠まれている歌で、特に逢坂の関と粟津が共に詠まれている点が

目をひく。

頓阿以前、平安時代まで、逢坂と粟津が一緒に詠まれた例は「関こえて粟津の森のあはずともし水にみえしかげをわするな」（後撰集・恋四・801・よみ人しらず）の一例のみである。それ以降、粟津は「逢はず」の含みから、恋人との断絶を表すなど、やや観念的な傾向を呈していき、逢坂の関とともに詠まれた例は『後撰集』以降、しばらく見えなくなるのである。しかし、散文作品で粟津を確認してみると、平安中期、『更級日記』の作者、菅原孝標女が東国から帰京する際、「粟津にとどまりて、師走の二日京に入る」と帰京を前にして、粟津に泊まったことがわかる。歴史上、古くからこの粟津は東国に向かう、もしくは京へ入る前の経路にあったらしく、中世に入っても引き続きその役割を担っていた。『東関紀行』には「関山をすぎぬれば、打出の濱、粟津の原なんど聞けども、いまだ夜のうちなれば、定かにも見えわかず。」とあり、京より武佐へ向かう『東関紀行』の作者も「逢坂の関」を越え、次の行き先としてひとまず「粟津」を思い浮べている。また、飛鳥井雅有の『春の深山路』にも、建治四（1278）年十一月十四日、鎌倉下向の際、逢坂を越えた後、「此朝臣（重清）猶留まらず。駒並めて、打出の浜もうち過ぎて、粟津の浜面なる家に立入。…（中略）…お互いに名残惜しみて、酔ひ泣きにや。涙落としつ」とあり、見送りの重清と琵琶湖岸の粟津で泊まり、別れの杯を交わしている。以上から分かるように粟津は、逢坂を越え東国へ向かう実際の経由地として、鎌倉時代以降、東国への関心とともに新たに注目されるようになったのである。こうした粟津に対する関心は、東国への旅の実体験に基づくものであり、散文に止まらず、鎌倉以降の和歌にも反映されるようになる。

36　夕づくひ関こえゆけば粟津野の森の木ずゑに月ぞいざよふ　（新撰和歌六帖・608・知家）

37　逢坂やしぐるる秋の関こえてあはづのもりの紅葉をぞみる　（柳葉和歌集・749）

38　相坂の関こえなばと思ひしに粟津の森のくずの下風　（夫木和歌抄・5861・権僧正公朝）

鎌倉時代に詠まれた36～38の三首を見てみると、36のように夕暮れ時、逢坂の関を越えた作中主体が粟津に至り、月を見るという時間の流れに沿った旅の実体験に基づく叙景が詠まれており、37のように「逢坂の関」を境に東方から春が到来するという観念[16]に着目し、東から降った時雨とともに秋が逢坂の関を越えて西へと滲んでいくことが詠まれている。38は逢坂に「逢ふ」、粟津に「逢はず」をかけ、

結ばれない恋の模様を詠んでいる。いずれも、「粟津」が持っている東国への経由地としての意識に基づいているが、特に目を引くのは宗尊親王や公朝によって詠まれた37・38である。宗尊親王は周知のごとく、鎌倉第六代の将軍として鎌倉歌壇の全盛期を率いたが、後に政治的な騒動で将軍を追われ、帰洛の経験を持っている人物である。さらに公朝の場合も、『中務卿親王家五十首歌合』など、宗尊親王の主催する多くの歌会に名が見え、宗尊親王歌壇の主要な成員であった。「中務卿親王都へのぼり給ひて後、読みける」という詞書を持つ「いまはただ月と花とに音をぞなく哀れしれりし人を恋ひつつ」（拾遺風体和歌集・別離・237）で、失脚した宗尊親王への哀惜を見せている点から、彼と親王との個人的な親交をも想定される。[17] すなわち和歌において、「粟津」と「逢坂の関」との間が新たに鎌倉期に入って注目されたのは、先に『更級日記』や『東関紀行』・『春の深山路』などで確認した通り、東国へ向かう旅の現実に裏打ちされ、そうした旅の実体験を歌に詠み込もうとした当時の歌人たちの動きと無縁ではないと思われる。そして宗尊親王や公朝の詠も、その京・鎌倉往還の経験をもつ歌人たちの詠の系譜にあるのである。

一方、頓阿の詠を見てみると、先ほど挙げた例とは異なっていることがわかる。もちろん、頓阿の詠も宗尊親王や公朝と同じく、彼自身の東国遊行の実体験に根付いていると思われる。が、頓阿の歌には『草庵集』の羈旅の巻頭歌である34の「やがてはや都の山ぞ見えずなりゆく」から35の「相坂の鳥の音とほく成りにけり」と、逢坂の関を越え、京を後にして東国へと旅立つ作中主体の未練や不安な心の足取りがくっきりと印象づけられるように配列されている。そして、特に35の場合は、逢坂と粟津の持つ掛詞としての伝統をふんだんに利用しながらも、逢坂の関と縁のある「鳥」を粟津との間に媒介させ、さらに下句で露を詠み込むことで、それぞれの歌枕と歌詞同士がより緊密に結び合うように工夫を施している。それによって「相坂のゆふつけになく鳥のねをききとがめずぞ行きすぎにける」（後撰集・雑二・1126・敏行朝臣）のような古歌の世界と絶妙に呼応する歌にしていると思われる。頓阿は京を離れる旅人の心情から離れることなく、しかもそれによって本歌の心情を生かす新たな詠み方を提示し得たと思う。こういう頓阿自身の旅の経験こそ、従来の歌枕が持つ和歌的伝統に基づきながらも、それに埋没することなく、詠もうとする歌枕に多彩な視線をあてることを可能にしてくれた一つの要素ではなかったろうか。

5. おわり

以上、歌枕に関わる頓阿詠の特色を見てきた。古歌にただすがるのみで変化の乏しい歌だという頓阿に対する批判は、ここに至って再考しなければならないと思う。彼が古典を大事にし、その世界に心を寄せていたのは確かであったとしても、古典の世界に閉塞した歌とはどうしても思えないのである。彼は、題詠とはいえ、古典に心を寄せつつ、古典と旅の実体験から手に入れた歌枕の現実を、一首の美的空間に絶妙になじませる技量を持っていた。その点が頓阿詠の特色であると思うのである。

【注】

（1）今川了俊の言及は『和歌所への不審條々』で「頓阿が歌様を見申候へば、十首に七、八首は古歌の言を、過半は用読て候」と指摘し、『了俊日記』では「当時毎人頓阿法師をば人丸赤人のごとくに申めれども、此法師もわづかたに古歌にすがりて只一ふしてしなの侍しばかりをぞ得たるすがたとみへて侍し」と批判し、その弟子、正徹も彼の著作、『正徹物語』で、為世が「極真なる體」を詠み、四天王もその「極真の體をのみ此道の至極」と考えて詠出したので、彼らの頃より歌が損じたとした。

（2）『万葉集』の引用は、当該歌に限って仙覚本系統と非仙覚本系統（広瀬本）に校異は見当たらないため、西本願寺本の訓に基づいて、適宜に『類聚古集』を参照した。

（3）鴻巣盛廣（『万葉集全釈』）・土屋文明（『万葉集私注』）は『続日本紀』の記事から、蒲原町に昔、黄金が取れたという『駿河志料』の伝承に基づいて、田子の浦を由比蒲原辺りとし、澤瀉久孝（『万葉古径』）は、『続日本紀』の記事と天文十四（1545）年『東国紀行』の「清見が關の此方六里ばかりの程、皆田子の浦となむ」という記事に依拠し、興津辺りから由比蒲原・岩淵辺りまでと規定し、武田祐吉（『万葉集全註釈』）と中西進氏（『万葉の歌』）も概ね、それに従っている。

（4）松村博司「『更級日記』帰京の旅の地理的錯誤について」（『名古屋平安文学研究会会報』一、一九七八・四）　松村博司は、高田正義の論に従い、「浦」の語義と田口益人の万葉歌の解釈によって、昔の田子の浦が現在の清見崎附近の海域だと推定しており、多田一臣氏（『万葉集全解』）も基本的に松村説に従っている。

（5）西本願寺本『三十六人集』では、第四句、「ふしてそ（マ）やを（マ）」になっている。

（6）新編国歌大観では「たえぬ日ぞなき」であるが、意味不通のため、『嘉元百首』の本文に従った。
（7）澤潟久孝『万葉古径』（弘文堂書房、一九四一）
（8）頓阿の歌歴において、金蓮寺の浄阿のもとで修行した時期は、彼の二十代の頃である。
（9）金井清光『一遍と時衆教団』（角川書店、一九七五）
（10）稲田利徳『和歌四天王の研究』（笠間書院、一九九九）
（11）「他阿上人法語」巻四・八一、『昭和新纂　国訳大蔵経　宗典部第八巻』（東方書院、一九三二）
（12）藤原正義「他阿上人法語覚え書」『兼好とその周辺』（桜楓社、一九七〇）
（13）青木厚子「万葉地理『田子の浦』考」（『日本文学』四、一九五五・一）
青木氏は「和名抄」の郷名等をもとにして、赤人が通った当時の東海道の経過地を興津町興津（息津郷）→蒲原町蒲原（蒲原郷）→富士河を渡る→富士町蓼原（蒲原郷）→吉原市伝馬町（駅家）→吉永村比奈（姫名郷）→浮島村船津（柏原駅）→根方廻道をそのまゝ通って→金岡村西沢田（山崎郷）→長泉村下長窪（長倉駅）→足柄道へかかると想定している。
（14）文弥和子「本歌取りへの一考察―定家以後の歌論における―」（『立教大学日本文学』一九、一九七二・十二）文弥和子氏の論によると、「（二　本歌の心にすがりて…略）（三　本歌の心になりかへりて…略）は、「作歌の上からも、判定にあたっても、実際に判別しにくく、又そこまで厳密な区別を必要ともしない」ので、愚問賢注では本歌の心をとりて、風情をかへたる歌に統合され、取り方は同じであっても、特に贈答の体として明らかなものが、③（本歌に贈答した る体）として取り出されたとされる。そして、この改変は、『井蛙抄』から『愚問賢注』への「淘汰」の過程であると結論付けられている。
（15）石田吉貞『藤原定家の研究』（文雅堂銀行研究社、一九六九）
（16）「逢坂の関をや春も越えつらん音羽の山の今日は霞める」（後拾遺集・春上・4・俊綱）
（17）中川博夫「僧正公朝について」（『国語と国文学』六〇（九）、一九八三・九）
＊『万葉集』を除き、本文中に引用した和歌は、歌番号および本文とも『新編国歌大観』（角川書店）に拠った。但し、私意によって適宜、漢字に当て、表記を改めた箇所がある。
＊引用本文の『続日本紀』『更級日記』『東関紀行』『十六夜日記』『春の深山路』は新編日本古典文学全集、『名所方角抄』は、富山市立図書館蔵山田孝雄文庫、『東国紀行』は群書類従、『近来風躰』

は『歌論歌学集成十巻』に拠っており、図は中西進『万葉の歌：人と風土』（保育社、一九八五）を私意によって訂正し、載せている。